

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22401016
 研究課題名（和文）北欧ケアの実地調査に基づく理論的基盤と哲学的背景の研究
 研究課題名（英文）A Research into theoretical grounds and philosophical background of Nordic Caring based on field work
 研究代表者
 浜渦 辰二（HAMAUZU SHINJI）
 大阪大学・文学研究科・教授
 研究者番号：70218527

研究成果の概要（和文）：医療、看護、リハビリ、介護、福祉、保育、教育まで広がる「北欧ケア」を、哲学・死生学・文化人類学といったこれまでこの分野にあまり関わって来なかった研究者も参加して学際的に、しかも、実地・現場の調査により現場の人たちと研究者の人たちとの議論も踏まえて研究を行い、医療と福祉をつなぐ「ケア学」の広まり、生活中心の「在宅ケア」の広まり、「連帯／共生」の思想が根づいていること、などが浮かび上がってきた。

研究成果の概要（英文）：We performed our interdisciplinary research on the Nordic Caring including medicine, nursing, rehabilitation, social welfare, child care and education, by participation of researchers who didn't commit with such field so far, and based on field work through discussion with persons working in the field and researchers. Through our research it has come to light that "Caring Science" binding medicine and welfare is spreading out, that "Home care" centered into life is already established, and that the idea of "Solidarity or Living together" is took root in history, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2011年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2012年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：哲学／哲学・倫理学

キーワード：北欧ケア、実地調査、理論的基礎、哲学的背景、学際的研究

1. 研究開始当初の背景

（1）代表者はこれまで、フッサールの間主観性の現象学から出発し（拙著『フッサール間主観性の現象学』創文社、1995年）、間主観性の具体的なあり方を解き明かす一つの道としてケアの人間学に取り組んできた（拙編著『〈ケアの人間学〉入門』知泉書館、2005年）。そこから生老病死にまつわるケアの人

間学の現在的な諸問題に取り組んで行くなか、近年わが国で議論されている終末期医療の問題に焦点を当てた問題提起を行った（拙稿「生と死をケアすること—ケアの現象学的人間学から—」日本哲学会編『哲學』No. 58、2007年）。それは終末期医療の決定にあたって、患者の自己決定だけではなく、患者と家族と医療従事者の間でのコミュニケーション

ンのなかで共同決定していくことを理念として目指すべきだという主旨を現象学的なアプローチから考察したものであった。

(2) それと平行しながら、科学研究費補助金による、「いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築」(平成 12~13 年度) から始まって「いのち・からだ・ところ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」(平成 18~20 年度) までの共同研究において、また、ケア従事者および市民と継続してきた「ケアの人間学」合同研究会(拙編著「ケアの人間学—合同研究会要旨集—」平成 15 年から現在に至る)において、さまざまな形でケアの問題を考察してきた。現在も、研究分担者として「ケアの現象学の基礎と展開」(平成 21~23 年度) および「多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究」(平成 20~25 年度) に参加して、ケアの現象学と間文化現象学の繋がりの中で考察を進めている。

(3) と同時に、これら共同研究のなかで、フランス・ドイツのホスピス・ケアの現場(平成 17 年 9 月) とデンマーク・スウェーデンの高齢者ケアの現場(平成 19 年 11 月) を視察する機会を得、それらを通じて、南欧・北欧のケア観の違いを感じ取ってきた(拙稿「魂のケアについて—仏独・ホスピスとスピリチュアル・ケア研修報告—」平成 18 年 1 月、同「高齢者ケアの倫理と法をめぐって—北欧の高齢者ケア視察研修報告—」平成 20 年 3 月)。北欧の高齢者ケアについて、「寝たきり老人がいらない」だけでなく、「本人が食事の経口摂取を望まなくなったら無理に経管人工栄養をしない」という、日本のケア観との違いも感じてきた。さらに、ケアの倫理とビジネスの倫理との関係について論じつつ(拙稿「ビジネス・倫理・ケア」平成 21 年 10 月)、福祉国家についての考察も始めている。

(4) 以上の研究を通じて、福祉先進国である北欧諸国(デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、アイスランド)の福祉・ケア(これを総称して、以下では「北欧ケア」と呼ぶ)について、福祉・ケアの研究者や政治学者・経済学者による研究・報告はなされているものの、その理論的基礎・哲学的背景が十分明らかにされておらず、北欧ケアの理論的基礎・哲学的背景を単なる文献研究ではなく、実地の現場のなかでそれがどう生かされているかを学際的な観点から調査し、それに基づいた学際的な研究によって明らかにする必要があると考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 看護、リハビリテーション、福祉、これらは広い意味でのケアに包摂することが

できるが、これらのケアはそれぞれの具体的な実践をもつとともに、それを支えている思想として理論的基礎と哲学的背景を持っている。ところが、それぞれのケアの従事者やケアの研究者は、ケアの現場での具体的な対処に関心が向かってしまうため、理論的基礎や哲学的背景にまでなかなか視野を広げる余裕がない。逆に、思想や理論としての哲学・倫理学に携わる研究者には、これらのケアの抱える具体的な問題に関心が向かわないため、その理論的基礎や哲学的背景を明らかにする作業に携わることはない。

(2) 本研究の課題は、これらのケアが先進的に行われている北欧諸国のケア(北欧ケア)を手がかりに両者の間を架橋することによって、北欧ケアの現場の調査を踏まえながら、その理論的基礎・哲学的背景を明らかにすることである。

(3) 看護、リハビリ、福祉というケアの各分野での現地調査を国内研究会で報告、情報交換をし、日本・米国・西欧・南欧などとの比較文化的考察も視野に入れながら、北欧諸国がもつケア思想の共通点と差異点を学際的な方法で明らかにしていく。それによって、従来は、断片的に紹介されるに留まっていた北欧ケア理論的基礎と哲学的背景がはっきりと浮き彫りにされてくることになる。

3. 研究の方法

本研究は、学際的な共同研究により、北欧ケアの現場の調査を踏まえながら、その理論的基礎と哲学的背景を明らかにすることを目的としており、それを達成するために、

(1) 各専門分野での文献研究(哲学・倫理学、死生学、美学、文化人類学、看護学、リハビリテーション学、福祉学)を基礎にして、

(2) 北欧諸国におけるケアの現場での調査を踏まえ、

(3) それぞれの報告と情報交換・意見交換のための国内での定期的な研究会(年 4 回ほど)と、

(4) 北欧研究者や国内研究協力者を招聘した研究会によって、

(5) 他の地域(日本・米国・西欧・南欧など)との比較も視野に入れながら、北欧諸国がもつケア思想の共通点と差異点を明らかにし、

(6) インターネットおよび紙媒体により随時研究成果を公開し、

(7) 近い将来に研究成果をまとめた書物を出版することを目指す、という方法的ステップにより研究を遂行した。

4. 研究成果

(1) 私たちの共同研究は、医療、看護、リハビリ、介護、福祉、保育、教育まで広がる

「北欧ケア」を、哲学・死生学・文化人類学といったこれまでこの分野にあまり関わって来なかった研究者も参加して学際的に、しかも、実地・現場の調査を踏まえ、現場の人たちと研究者の人たちとの議論も踏まえて行うというところに、これまでにない特徴をもっていた。

(2) 私たちの共同研究は途上であるが、これまでの考察から「北欧ケア」の特徴として浮かび上がって来たことを挙げると、第1に、上に広い意味で「ケア」と呼んだ各分野の連携が機能しており、医療と福祉を繋ぐ全体としての「ケア」を考える「ケア学」が広まって来ていること、第2に、これも広い意味での「在宅」を中心に「ケア」が行なわれる体制を基本として、「患者中心」よりも「生活者中心」という考え方が大切とされていること、第3に、「自立／自律」の思想とともに「連帯／共生」の思想が長い歴史とともに深く根づいていること、などである。

(3) この3年間に12回の研究会を開催するとともに、予告的な市民公開シンポジウムと最後の成果を発表する市民公開シンポジウム「いま、北欧ケアを考える」を開催し、また、ホームページを立ち上げて、研究会の案内と記録を逐次公開し、研究の成果を広く一般にも公開してきた。さらに、研究分担者と研究協力者により、最終年度に刊行された『看護研究』に「北欧ケアとは何か—看護研究への示唆」という特集を組むとともに、『地域リハビリテーション』に7回にわたって、研究分担者6人により連載「みんなでケアを考える！ 哲学者、文化人類学者、ケア研究者・従事者が一緒に考えるこれからの高齢者ケア」を掲載した。それらを含めて、最終的に3年間の研究業績をまとめた報告書『いま、北欧ケアを考える』を発行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計62件)

1) 浜渦辰二、北欧ケアと日本のケア—哲学の立場からの比較、『地域リハビリテーション』(三輪書店)第7巻12号、依頼論文、2012年、1042-1045頁

2) 浜渦辰二、北欧ケア研究のために、『看護研究』Vol.45-05:特集「北欧ケアとは何か 看護研究への示唆」、依頼論文、2012年、426-438頁

3) 浜渦辰二、応用現象学とケア論—北欧現象学との交流のなかから—、静岡大学哲学会『文化と哲学』第29号、依頼論文、2012年、1-14頁

4) 浜渦辰二、ケアの倫理と看護、浜渦辰二・宮脇美保子編『シリーズ生命倫理学・第14

巻 看護倫理』所収(丸善出版)、依頼論文、2012年、195-217頁

5) 竹之内裕文、「自然な死」という言説の解体—死すべき定めの意味をもとめて、安藤泰至・高橋都編『シリーズ生命倫理学・第4巻 終末期医療』収録(丸善出版)、依頼論文、2012年、126-142頁

6) 竹之内裕文、北欧ケアの思想的な拠り所—問いとしての「福祉」、『看護研究』Vol.45-05:特集「北欧ケアとは何か 看護研究への示唆」、依頼論文、2012年、450-465頁

7) 竹之内裕文、生命倫理学から生命環境倫理学へ—生の「現実」に応答する倫理学をもとめて、東北大学哲学研究会編『思索』第45号(2)、野家啓一先生御退職記念号、依頼論文、2012年、321-344頁

8) 竹之内裕文、出会いから考える人間の死生と在宅ケア、『地域リハビリテーション』(三輪書店)第8巻1号、依頼論文、2013年、63-66頁

9) 田中純子、勝野とわ子、高橋照子、パースイ理論における True Presence (真に共にある)の概念分析、日本保健科学学会誌、15(3)、査読あり、2012年、141-151頁

10) 中河 豊、音楽療法と哲学をめぐって、中部大学『アリーナ』第13号、査読なし、2012年、129-136頁

11) 備酒伸彦、「自立」とは何か、訪問リハビリテーション、合同会社 gene、第2巻第5号、依頼論文、2012年、269-274頁

12) 備酒伸彦、北欧ケアと日本のケア、『地域リハビリテーション』(三輪書店)第7巻9号、依頼論文、2012年、770-772頁

13) 備酒伸彦、高齢者ケアに関わる理学療法士はなにをなすべきか・なにができるか、理学療法学、第39巻第4号、依頼論文、2012年、245-248頁

14) 中村 剛、これからの社会福祉—倫理と正義を基盤にした社会福祉、塩野敬祐・福田幸夫編『現代社会と福祉〔第2版〕社会福祉・福祉政策』収録、(弘文堂)、2013年、195-214頁

15) 福井栄二郎、譲渡できないものを贈与する—ヴァヌアツ・アネイチウム島における名前の贈与と公共圏—、柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏—フィールドワークからみた重層性—』(昭和堂)、査読あり、2012年、107-123頁

16) 福井栄二郎、老人が排除される日—ヴァヌアツにみるふたつの「老人問題」—『歴博』172号、依頼論文、2012年、11-14頁

17) 福井栄二郎、「人格」の手前にあるもの—ヴァヌアツ・アネイチウム島からみるかけがえのなさ—、『南方文化』第39輯、査読あり、2012年(印刷中)

18) 福井栄二郎、「誰」が問われるケア—文

化人類学の視点から一、『地域リハビリテーション』第8巻2号、依頼論文、2013年（印刷中）

- 19) 竹内さおり、北欧と日本の認知症ケア、『地域リハビリテーション』（三輪書店）、第7巻10号、依頼論文、2012年、863-866頁
- 20) 山本大誠、理学療法概論 第6版、共著、医歯薬出版株式会社、2013年、347-351頁
- 21) 山本大誠、北欧と日本のケア教育の立場からの比較、『地域リハビリテーション』第7巻第11号、依頼論文、2012年、956-959頁
- 22) 浜渦辰二、ビジネスとケアをつなぐ倫理、神田外国語コミュニケーション研究所編『異文化コミュニケーション研究』、査読あり、第23号、2011年、123-132頁
- 23) 浜渦辰二、生老病死について、NP0法人愛逢編『最期の居場所—暮らしの中のホスピス』、依頼論文、2011年、6-25頁
- 24) 浜渦辰二、ケアの現象学への途上で—故・渡邊美千代を偲んで—、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフィジカ』第42号・鷺田清一名誉教授退職記念号、査読なし、2011年、9-22頁
- 25) 浜渦辰二（編著）、ケアの臨床哲学—シンポジウムの記録—、2011年、全274頁
- 26) 竹之内裕文、生活のなかの死：地域社会での看取りを考える、『医学哲学医学倫理』第29号、日本医学・倫理学会編、シンポジウムのまとめ、2011年、1-2頁
- 27) 栩川綾子、黒澤昌洋、高橋照子、渡邊知子、看護における現象学の活用とその動向（その2）、日本看護医療学会雑誌、査読あり、第13巻第1号、50-61頁
- 28) 中河 豊（訳）、クリストフ・シュヴァーベ、ウルリケ・ハーゼ著、出会いの音楽療法、風媒社、2011年9月、全346頁
- 29) 川越雅弘、備酒伸彦、要介護高齢者に対する退院支援プロセスへのリハビリテーション職種の関与状況—急性期病床、回復期リハビリテーション病床、療養病床間の比較—、査読あり、理学療法科学、2011年、26(3)、387-392頁
- 30) 川越雅弘、備酒伸彦、一般高齢者の生活機能の特徴と生活支援ニーズ、神戸学院総合リハビリテーション研究、査読あり、2012年、第6巻第2号、9-21頁
- 31) 川越雅弘、備酒伸彦、病床区分別にみた病床運営及び退院先とのリハビリテーション連携状況の差異、理学療法兵庫、NO.15、査読なし、2012年、182-189頁
- 32) 中村 剛、福祉哲学とは何か—「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」の序論として—、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフィジカ』第42号・鷺田清一名誉教授退職記念号、査読なし、2011年、123-134頁

- 33) 中村 剛、福祉思想におけるケアの倫理の可能性—正義の倫理を補完する福祉思想、関西福祉大学社会福祉学部研究会編『関西福祉大学研究紀要』第15巻第2号、査読あり、2012年、37-44頁
- 34) 福井栄二郎、命名とケア—ヴァヌアツの事例から—、『九州人類学会報』38号、査読あり、2011年、71-78頁
- 35) 山本大誠・奈良勲、精神疾患に対する理学療法の臨床および教育研究—北欧における海外研究報告—、神戸学院総合リハビリテーション研究、査読あり、6巻2号、2011年、111-117頁
- 36) Shinji Hamauzu、To a Phenomenological Approach of the Problem of Organ Transplant after Brain Death、臨床哲学、査読あり、第12号、2011年、20-30頁
- 37) 浜渦辰二、人間の成熟をめぐる—一成熟の間主観性という次元—、名古屋哲学研究会編『哲学と現代』、査読あり、第26号、2011年、6-19頁
- 38) 浜渦辰二、脳死臓器移植問題への現象学的アプローチにむけて、大阪大学文学会編『待兼山論叢』、第45号、査読なし、2010年、1-17頁
- 39) 竹之内裕文、問いとしてのヒューマン・エコロジー：環境と倫理をめぐる、『ヒューマン・エコロジーをつくる—人と環境の未来を考える』所収、野上啓一郎編（共立出版）、査読なし、2010年、175-197頁
- 41) 竹之内裕文、書評とリプライ、「宗教と社会」学会編『宗教と社会』、第16号、2010年、183-191頁
- 42) 野原留美、畠中宗一、牧野智恵、高橋照子、対人援助職の対人関係能力を促す支援に関する研究—IPR トレーニングの有効性—、平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)「情緒的自立に関する総合的研究」研究成果報告書、2011年、197-215頁
- 43) 中河 豊、人間の成熟を考える、名古屋哲学研究会編『哲学と現代』、第26号、査読あり、2011年、2-5頁。
- 44) 川越雅弘・備酒伸彦、一般高齢者の生活機能の特徴と生活支援ニーズ、神戸学院総合リハビリテーション研究、第6巻第1号、11-23頁
- 45) 中村剛、福祉思想としての新たな公的責任—『自己責任論』を超越する福祉思想の形成—、日本社会福祉学会編『社会福祉学』、51(3)収録、2010年、5-17頁
- 46) 中村剛、書評りぷらい 福祉哲学の構想：福祉の思考空間を切り拓く、日本社会福祉学会編『社会福祉学』51(1)収録、2010年、106-108頁
- 47) 中村剛、論壇 社会的養護を支える倫理と正義、全国児童養護施設協議会編『季刊 児童養護』41(1)収録、2010年、2-3頁

48) 山本大誠・奈良勲、精神疾患に対する理学療法の臨床および教育研究—北欧における海外研究報告—、神戸学院総合リハビリテーション研究、巻号、2011年

49) 山本大誠、統合失調症と運動、Schizophrenia Frontier、11巻1号、2010年、29-33頁

50) 前野真由美・榎本信雄・玉置泰明・前野竜太郎他、地域で支える外国人医療の問題と解決方法を見出す実践的研究、平成21年度静岡県立大学教員特別研究推進研究

〔学会発表〕(計15件)

1) 浜渦辰二、医療と福祉をつなぐケア学、鳥取県福祉研究学会第6回研究発表会記念講演、2013.02.23、鳥取県立福祉人材研修センター〔招待講演〕

2) 浜渦辰二、現代日本における死をめぐる状況、玉川大学学術研究所人文科学研究センター平成24年度第2回公開講演会、2012.11.10、玉川大学視聴覚センター〔招待講演〕

3) 浜渦辰二、ケアの現象学にむけて—現象学の可能性をめぐる(2)—、九州大学哲学回平成24年度大会、2012.9.29、九州大学〔研究発表〕

4) 浜渦辰二、北欧ケアの人間学、第44回「ケアの人間学」合同研究会、2012.6.16、静岡看護専門学校〔研究発表〕

5) 竹之内裕文、死生観と看取り—スウェーデンで考えたこと、十和田緩和ケアセミナー(招待講演)、2012年06月02日、青森県・十和田市立中央病院

6) 竹之内裕文、「いのち」が語られる地平—他なるものとのかわりめぐる、日本宗教学会2012年度学術大会、2012年09月09日、三重県・皇學館大学

7) 竹之内裕文、死すべきものとして共に世界に住まう—北欧「福祉」が照らしだす課題、東北哲学会第62回大会、2012年10月20日、宮城県・東北大学

8) 竹之内裕文、北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所—日本社会におけるケアの再構築のために、静岡大学哲学会第35回大会、2012年11月03日、静岡県・静岡大学

9) 竹之内裕文、看取りを支える死生観の問題—北欧社会との比較を通して、第17回静岡健康・長寿学術フォーラム(招待講演)、2012年11月17日、静岡県・グランシップ

10) 竹之内裕文、在宅緩和ケアと宗敏—岡部健とともに歩んだ10年をふり返って、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座・心の相談室主催(招待講演)、2012年11月18日、宮城県・東北大学

11) 竹之内裕文、がん患者の看取りを問いなおす—在宅緩和ケアを支える死生観と社会的課題、2013年03月19日、福島県・福島

県立医科大学附属病院

12) 備酒伸彦、「チーム医療教育」高齢者ケアを通して、第38回日本保健医療社会学会大会、2012年05月19日、兵庫県・神戸市看護大学(神戸市)

13) 山本大誠、BBAT、臨床精神科リハビリテーション研究会、2012年12月08日、道ノ尾病院

14) 竹内さをり、スウェーデンにおけるケアに関する意識について—市民に対する意識調査結果から—、2013年05月19日、東京都・東洋大学・朝霞キャンパス

〔図書〕(計1件)

1) 浜渦辰二、看護倫理、編著、丸善出版、2012年、全259頁

2) 竹之内裕文、『七転び八起き寝たきりのちの証—クチマウスで綴った筋ジス・自立生活20年』編著、新教出版社、2010年、全328頁

3) 中村剛、社会福祉学原論—脱構築としての社会福祉学、単著、みらい、2010年、全295頁

4) 中村剛、『底辺にむかう志—“社会問題と連帯”の今』、単著、あいり出版、2010年、全157頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~cpshama/NordicCare/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜渦 辰二 (HAMAUZU SHINJI)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70218527

(2) 研究分担者

中村 剛 (NAKAMURA TAKESHI)

関西福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：00412099

山本 大誠 (YAMAMOTO TAISEI)

神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・講師

研究者番号：10411886

福井 栄二郎 (FUKUI EIJIRO)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：10533284

中河 豊 (NAKAGAWA YUTAKA)

名古屋芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：20198047

前野 竜太郎 (MAENO RYUTARO)

聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：50347184

高橋 照子 (TAKAHASHI TERUKO)
西武文理大学・看護学部・教授
研究者番号：8017150200
備酒 伸彦 (BISHU NOBUHIKO)
神戸学院大学・総合リハビリテーション学
部・教授
研究者番号：80411883
竹之内 裕文 (TAKENOUCHI HIROBUMI)
静岡大学・創造科学技術大学院・教授
研究者番号：90374876
竹内 さをり (TAKEUCHI SAWORI)
甲南女子大学・看護リハビリテーション・
講師
研究者番号：90454727

(3)連携研究者
なし